またまた、悲しい無理心中事件報道に接して

親による障害のある我が子殺しや心中事件に関しては、当ＨＰでも度々触れてきた（「雑学 BN」の「レポート関係」P、2004. 2.「現代社会の障害児観の一面の検証」：参照）。

またまた、悲しい事件（報道記事は２Ｐに貼付）が、しかも同じ仙台市内で起きた。

こんなに福祉、福祉といわていれる時代なのに、根本的なところでは何の解決にも繋がっていないのかなあと悲しくもあり、空しさも感じる。

究極的には、我が子という前に一人の存在ある相手として向かい合い、係わり合い、共に生きるとはどういうことか、また、周りの方々の支援を遠慮なく受ける勇気等の検証等が、まだまだ不十分な気がしてならない。

親をそこまで追いつめている社会の風潮を作っている我々も、こうした親子にどう向き合っているかの意識が当然問われていること。

これは何も障害児・者問題に限らず、虐待問題、更に最近の社会の一般的な育児の問題にも潜む問題のように思えてならない。

例えば、メル友から聴いた話だが、「給食費を払っているから、給食時間に『いただきます』と言わせるのはおかしい」と学校側に申し入れる親もいるとか。

また、そうした申し入れを受け入れるかどうかを、教師間で議論がされたとか。

申し入れた親も、なぜ食前に「いただきます」というかを知らないのでしょうね。教え、気づかせれば、親もきっとその申し入れを取り下げるでしょうね。

このように、生きていく、生活していく知恵を、大人は次世代に伝えようとしていないように思えてならない。

虐待する親には、親自身の育ち直しが必要と言われているが、育ち直しの必要なのは、何もそうした親だけでないような気がする。先の例のように、こんなことで議論する教師たちも育ち直しが必要かも…。

コミュニケーションとは、「相互交渉であり、互いに係わり合い、輔け合いながら、どう生きるかを自らに問い続ける活動」ということからすれば、教師間で議論するまでもなく、申し入れた親とこそ、教師自身が相互交渉できる勇気と力を持って欲しいですよね。

この記事を目にして、何かコメントがありましたら、お聞かせいただければ幸いです。

（2006 年 2 月 27 日　記）

「娘を殺した」69歳母、36歳長女と無理心中か

26日午前0時半ごろ、仙台市宮城野区鶴ヶ谷東4、無職遠藤カツ子さん（69）方で、カツ子さんと長女のひとみさん（36）が死亡しているのを、親類からの110番通報で駆けつけた宮城県警仙台東署員が発見した。

調べによると、ひとみさんは寝室に倒れていて首を絞められた跡があり、カツ子さんは浴室で倒れ、手首に切り傷があった。

カツ子さんは同日午前0時ごろ、親類に「娘を殺した」という電話をかけており、室内からは「疲れた。後はよろしく」との内容で無理心中をほのめかす書き置きも見つかったため、同署で詳しく調べている。遠藤さんは2人暮らしだった。ひとみさんは知的障害があり、足が不自由だったという。

（2006年2月26日15時37分　読売新聞）